

一方、ヒト幼児については、資料の制約上、3、5、7歳の男女10名ずつを選択し、3年間の頭部X線規格写真を用いて同様な計測項目を分析した。両者の成長発育様式の差異については、多変量解析法を用いて、現在鋭意検討中である。

自由：30

下北半島におけるニホンザルとタイワンザルの接触を防止するための研究

森 治（下北野生生物研究所）

和田 久（佐井小学校）

下北半島におけるニホンザルとタイワンザルの接触を防止する方策は次の2点にしばられる。その1は、タイワンザルの群れの所有がはなれザルの出ないように完全な管理をするか、完全な管理のできる施設に移すことである。その2は、現に群れから離れているタイワンザルおよび1が実行されるまでに群れを離れたサルを発見ししだい捕獲することである。

1については、5月14日には森が中心となり下北地方文化財審議委員協議会の名で県知事あてに要望書を提出した。この段階で、担当課は行政指導で事は解決できるので、条例制定の必要はないとした。その後も世論を背景に働きかけ、8月28日、環境保健部長は早い時期に動管法に基づく条例を制定することを約束した。担当課は、県内の危険動物の実態調査や意見聴取は行ったが、その後の進展はない。

2については、5月13日、東通村の南部、白糠地区で複数の尾の長いサルの目撃情報あり、間において8日間調査に向かったが直接観察はできなかった。その後、6月末から東通村北部での目撃が頻発し、森・和田の調査により直接観察例が増し、森によって2頭の個体識別がなれた。8月中旬以降は西に移動し、むつ市内（よりニホンザルの生息域に近い）に出没するようになり、9月14日、むつ市と東通の境でオス1頭が捕獲された。翌15日、むつ市内で尾の長いサルの目撃情報が寄せられたが発見できなかった。それ以後タイワンザルの情報はない。

2月から4月にかけて、東通村内・むつ市内ではなれザルの情報があつたが、いずれもニホンザルであることが森によって確認されている。

また、脇野沢周辺、半島西北域のニホンザルの夏・冬・春の調査では交雑個体は発見されていない。

今後の課題は、調査研究というよりはむしろ実務として、母群の完全管理を訴えつつ、北上するタイワンザルを確実に捕獲しなければならないし、ニホンザル生息域に進入したタイワンザル、交雑個体の発見に努めなければならない。この作業を誰が行うのか、霊研として検討いただきたい。

自由：31

小さな群れの維持機構

福田 史夫

屋久島西部林道沿いの半山地区に生息するT群は、オス5頭、メス5頭よりなる。このうちのオトナオス3頭とコドモオス1頭を除き、血縁関係が存在する。このような小さなサイズの群れはニホンザルとしては非常に希である。群れの個体間には親密な関係が存在する。この関係が群れを維持し、構成員がばらばらになるのを防いでいるといえる。この親密な関係を一緒に行動する関係と置き換えても良いであろう。1日の生活の全ての場において親密な個体同士が近接しているわけではない。1日の生活を採食・休息の2場面に分け、それぞれの場面での親和関係を明らかにするため2分毎のスキャン・サンプリングをおこなった。

群れを構成する個体間に於いては、血縁的結び付きが強い個体ほど休息中のグルーミングの時間が多いと期待される。本研究結果でも同様の結果を得た。しかし、母娘間に強い結び付きがみられたが、母息子（5歳）間では、移入した6歳オスとオトナメスの結び付きよりも弱かった。

採食中も血縁関係の強いものどうしの結び付きが強いという報告もあるが、移入した6歳オスを含むコドモ間の結び付きが母娘間よりも強かった。また、老メスはメスの中ではもっとも他の個体との結び付きが弱く、しばしば他個体から5・60mも離れて他の個体とは異なった食物を採食し、採食後は大きな声をあげながら本隊を探すことが多かった。

アルファオスを含むオトナオスの採食時は、他の個体から2m以上はなれて単独で採食することが多く、他個体との強い結び付きは見られなかった。オトナオスが他の個体を避ける場合もあった。

休息時はアルファオスだけが特定メスとの結合が見られ、他2頭のオトナオスはアルファオスとの結び付きがみられたが、メスとの間の結合は全く見られなかった。

小さな群れの個体間の結び付きについて言及しようとしたが、特定の強い結び付きが、一般化できるものなのか、あるいはその個体間の特別なものなのか10頭以下の小さな構成員よりなる群れだけに、本研究だけでは多くのことを語ることはできないので、さらに、小さな群れの個体間の結び付きに付いて調査を継続していきたい。

自由 : 32

ニホンザルの母親と成長した息子の社会関係

五百部 裕 (京都大・霊長研)

本研究では、社会交渉の分析を通してニホンザルの母親と成長した息子の社会関係を明らかにすることを目的とした。父系的社会を持つ霊長類種では、母親と成長した息子の中で様々な社会交渉が交わされる。特にボノボでは、集団内の母親の存在が息子と他のオスとの間の社会関係に大きな影響を与えることが明らかになっている。一方、母系的社会を持つニホンザルなどでは、オスは出自群を離れ、その時点で母親と息子の結びつきは切れてしまう。しかし、特殊な条件下(島や餌付けなど)では、母系的社会を持つ霊長類種においても、出自群を離脱しないオスや一度出自群を離れてもその群れに戻ってくるオスが存在する。こうした条件下での母親と成長した息子の間の社会関係を検討することは、たとえ特殊な条件下であっても、霊長類の母・息子関係の一般像を明らかにする上で必要であると考えられる。

こうした目的を達成するために、宮崎県幸島の群れを調査した。幸島は島という閉鎖された環境のため、オスは一度出自群を離れてもその群れに戻ってくる可能性が大きい。また、幸島では餌付けを縮小した後個体の成長が遅くなり、その結果オスが群れを離脱する年齢が遅れる傾向にある。

現地調査は1991年7月30日～8月6日と1992年3月3日～3月13日の2回行った。夏期の調査では、個体識別の再確認と予備的な資料収集を行った。一方、3月の調査では、群れ離脱前の5才以上のオスのコドモ4頭とその母親4頭を個体追跡した。個体追跡中には、追跡個体が関わった社会

交渉や近接個体に関する資料を収集した。こうした資料は現在分析中であるが、以下に予備的な分析の結果を記す。1) 母親と息子の間の近接の度合やグルーミングの頻度は、ペアによってかなりのばらつきが認められた。2) 近接の度合やグルーミングの頻度と母親の順位や息子の年齢の間に関係は認められなかった。3) 息子に関与した敵対的交渉に母親が介入することはなかった。今後は、この資料の分析を進めるとともに、さらに資料を増やして、ニホンザルの母親と成長した息子の社会関係を明らかにしていきたい。

自由 : 33

ニホンザルのテレメーターによる行動パターンの解析

東 英生 (野生動物保護管理事務所)

ニホンザルの野外調査において電波発信機を利用することによって、色々な知見が得られている。欧米諸国では、直接観察の困難な、野外での野生哺乳類等への調査で、早くから電波発信機を利用し、装着個体の位置を確認するだけでなく、行動パターンを解析する試みや、送られて来る電波から装着個体の生死の確認、生理学的な情報等を記録することによって多くの成果をあげている。

そこで本研究では、野外でのニホンザルの調査において、テレメーター利用の可能性を検証するために、ノーマルタイプの発信機と、電波発信機の急激な動きによって発信電波の波形パターンが変化するもの(モーションセンサー付き発信機)を一つの首輪に包埋し、両方の機能をもつ発信機を放飼場の個体に装着した。装着による、個体の反応を観察した後に、放飼場に設置してあるリモートコントロール付きテレビカメラを用いて観察を続けると同時に、装着した発信機から送られて来る電波の変化を記録した。受信機を通して記録計に描かれる波形と、受診した発信音、モニターテレビの画面の3つをビデオカメラで一つの画面に撮影し、記録した。それによって受信された波形のパターンと装着個体の実際の行動パターンとの対応を検討した。モーションセンサー付きの発信機は製品によって感度に差があった。ノーマルタイプ、モーションセンサー付きのどちらの発信機でも、静止状態を波形から読み取ることは可能であるが、行動パターンと波形のパターンには明ら